

◎近代下水道事業と太閤(背割)下水

明治に入ると、工業の発達、人口の増大など大阪市は一層の発展をみましたが、それに伴う都市施設の整備は著しく立ち遅れていました。

特に、明治19年(1886年)と23年(1890年)には、コレラの大流行により多数の犠牲者が出たため、上水道の創設、下水道の整備が強く求められました。

このため、明治25年(1892年)に上水道創設事業に着手すると共に、明治27年(1894年)12月には、最初の近代下水道事業である中央部下水道改良事業を開始しました。

この事業では、それまでの太閤(背割)下水の溝床にコンクリートを打ち、U字型とし、その表面にモルタルを上塗りして下水の流れがよくなるように改造するとともに、開渠であったものを石蓋で、暗渠(※)化しました。

中央部改良事業は、総事業費104万円(当時の本市の単年度決算額の約6倍)を使い、市内約120キロメートルにわたって太閤(背割)下水の改良を行ないました。

先人の貴重な遺産である太閤(背割)下水は、こうした改良を加えて現在でも使用されており、その規模は中央区・西区などで約20キロメートルとなっています。

大阪市では明治以降も、下水道整備をつねに市政の重点施策として積極的に進め、今日では、市内のほぼ全域に下水道が普及しています。

※暗渠:上部に蓋がある、地下に設けるなど外から見えないようにした水路

■ 改良後の太閤(背割)下水



◎太閤(背割)下水の大阪市指定文化財への指定

近世に造られた下水道が、改良されながらも現在まで使われ続けている事例は全国的に見てもほとんどなく、大阪の都市史を考える上でも貴重な資料です。このため、中央区・西区などで今も使われている太閤(背割)下水約20キロメートルのうち、将来にわたって保存が可能な約7キロメートルを「史跡」として平成17年度に大阪市の文化財に指定しました。

【名称】

**中央部下水道改良事業の下水道敷
(通称:太閤下水)**

詳しくは大阪市教育委員会事務局ホームページをご覧ください

■ 文化財の指定書

